



1. スマトラ縦貫ハイウェイ
2. 税金にアクセントを
3. 土木工事に核爆発エネルギーを
4. 土木史の講座を望む

1. 建設省はスマトラ縦貫ハイウェイの建設に全面的に協力するとの態度をきめ、近く調査団を派遣することになった。この道路は、国連エカフェで計画しているアジアハイウェイの一環をなすものであるが、遅れたスマトラ開発を目的とし、スカルノ大統領じきじきに計画の推進に当たったもので、延長 2400 km、幅員は 4 車線 30 m、工事は今年からはじまり、最初 5 ヶ年計画（6 億米ドル）では少なくとも 1 車線分を完成するという。

わが国の土木技術の海外進出が大きくなりあげられているが、従来は賠償関係の発電所、上下水道等の分野が多かった。このスマトラハイウェイをはじめとし、タイにも同様な話があり、さらにアジアハイウェイには国連を通じてすでに調査員を派遣しているが、名神高速道路で世界一流の折紙を得たわが国の道路技術が、広く海外に進出することが強く望まれる。 [J]

2. 給料以外の収入のある人は年度末は税金の申告で、毎年頭を悩まされる。「税金は高い」というのが定説であるが、実際にそうであろうか。たとえば、道路の舗装一つとって見ても、果して利用者が十分な利用料を税金として払っているといえるだろうか。もちろん、今日の複雑な経済機構の中で、車の所有者だけが、道路費を負担せねばならないということはないが、近頃的大型車による地方の道路の痛み方は全くひどいものだ。パッチワークなどずい分手まめに補修しているが、これが 2 週間ともたず、改築しない所は年々砂漠と化して行く有様である。改築の延長はきわめてわずかであり、大型車の数と走行距離は道路に投ぜられる費用と無関係に増大する。このような公共資産の収奪に対して、もう少し税金にアクセントを付け、道路破壊者の負担を増加する方策はないものだろうか。 [S]

3. 1965 年 1 月 29 日に発表されたアメリカ原子力委員会の 1964 年年报によると、第 2 パナマ運河の掘削計画に核爆発を使うと、経済的には相当有利であると計算されている。昨年 12 月 18 日に、ジョンソンアメリカ大統領は、パナマ運河にかわる新運河を、パナマとその付近の 5 ヶ所の候補地の中から選んで建設すると発表した。今のところ、運河をどこにするかは最終的には決定されていないが、これら 5 つの案について、在来の方法による掘削と、核爆発を使ったものとを比較すると表-1 に示すごとく核爆発

表-1 第 2 パナマ運河候補地の掘削費

| 場 所                 | 全 長<br>(km) | 候補地の高<br>最高標高<br>(m) | 在来方式に<br>よる費用<br>(億ドル) | 核爆発に<br>よる費用<br>(億ドル)    |
|---------------------|-------------|----------------------|------------------------|--------------------------|
| ① ニカラグア             | 225         | 230                  | 41.0                   | 19.0                     |
| ② パナマ(サンブラス)        | 60          | 300                  | 62.0                   | 6.2                      |
| ③ パナマ(ササルジ<br>~モルチ) | 74          | 300                  | 51.3                   | 7.7                      |
| ④ パナマ(現在地)          | 74          | 180                  | 22.9                   | 人口集中地帯<br>のため利用で<br>きない。 |
| ⑤ コロロンビア            | 164         | 290                  | 52.6                   | 12.0                     |

によるものが相当有利になっている。もちろん、費用の問題だけで工法を決定することはできないが、今後大きな土木工事では、核爆発利用の場合のコストを検討することはむだではないと思われる。 [C]

4. 建築には建築史の講座がありながら、土木には土木技術史の講座がなく、専門家も皆無に近いということは理解に苦しむことである。創立 50 周年を記念して学会から出された「日本の土木技術」を読んで大いに啓発され、せめてこの程度のことは、これから土木技術者を志す若い学生に知っておいて貰いたいと痛感した。この本が教科書に適するかどうかは判らないが、問題意識そして勇気や希望を与えるのに役立つことは確かであろう。この辺をきっかけとして、土木史の講座が育ってゆくことを念願したい。歴史書が物凄いブームを呼んでいるという最近の世相を身近かにとらえ一歩前進したいものである。 [E]